

## 事例番号 145 そこにあった「昭和の町」(大分県豊後高田市)

### 1. 背景

豊後高田市は大分県の北東部、国東半島の付け根に位置する人口は約 2.5 万人強のまちである。東西 17.1km、南北 23.2km、面積 206.64k m<sup>2</sup>の市域を持つ。市の東部から南部にかけては両子山や日本三叡山の一つの西叡山などが連なる山地であり、北部は周防灘に面する。風光明媚な自然に恵まれている。国東半島は中世仏教文化の地であり、豊後高田市にも国宝富貴寺や国重文熊野磨崖仏などの仏教遺跡が存在する。市内には戦国期の太友氏時代に築かれ江戸期に松平氏が入封した高田城の遺構がある。

国東半島の西の玄関口に位置する豊後高田市は、国東半島の需要を背景とする商業都市として発展してきた。大正期に開業した私鉄の旧宇佐参宮鉄道(大分交通宇佐参宮線)は宇佐神社と豊後高田市の中心部とを結んでいたが、1965(昭和 40)年に廃線となり、旧豊後高田駅は現在では大分北部バス高田営業所として半島一円のバス路線の起点となっている。



豊後高田市の位置 (資料:豊後高田市ホームページ)

旧豊後高田駅前から続く豊後高田市の中心商店街は「おまち」と呼ばれ、国東半島の人々が集まる商業拠点として発展してきたが、その繁栄のピークは昭和 30 年代であり、その後は宇佐参宮線の廃止、モータリゼーションの進展、郊外への大型店の進出などが原因となって衰退の一途を辿ってきた。豊後高田は元々、桂川対岸から広がってきたまちであるため、市役所や高田中央病院などは中心エリア外にあり、街なかにあった銀行、マルショク(食品スーパー)なども大通り沿いに移転してしまった。それに加えてロードサイドショップが増えていることから、中心市街地の衰退には著しいものがあった。商店街内部には後継者不足などの問題も抱えていた。

これらの状況は現在でも大きくは変わらず、経済環境は依然厳しいものの、近年では、地元事業者の自助努力と、これに呼応した市及び商工会議所等、中心市街地関係者の三位一体の取り組みが開始されたことから、交流人口の増加など活力回復の萌芽も見られるようになってきた。

豊後高田市におけるその取り組みとは、平成に入ってから開始された町の歴史を大切にしまちづくりの試みである。まず、1994(平成6)年度から1996(平成8)年度の3年間に「西の国東ロフト・ルネッサンス」として数々のイベント等が行われた。また、まちの衰退に危機感を抱いた商店街や豊後高田商工会議所の有志が中心となって中心市街地の活性化を模索する中から商工会議所を中心とした「豊後高田商業まちづくり委員会」が立ち上がった。そして同委員会により1996(平成8)年度に町の歴史を遡る町なみ実態調査が行われ、「豊後高田市街地ストリート・ストリート」が作成された。この調査により、古くて不便だと思われていた既存商店街が、歴史と伝統のある昭和の姿をとどめた貴重な地域資源であることが評価され、後の「昭和の町」につながるコンセプトである「昭和」が見出された。

さらに、1997(平成9)年度には、それまでの活動を踏まえて改めて「豊後高田市商店街・商業集積等活性化基本構想策定調査」が実施された。その結果、「レトロモダンな街づくり」のコンセプトが形成され、「昭和30年代」をテーマとしたまちづくりの方向性が示された。こうして、2001(平成13)年度から、空き店舗の活用とあわせて「昭和のまちづくり」の取り組みが始まった。



(資料) 豊後高田市観光協会ホームページ

## 2. 目標

豊後高田市の中心市街地活性化基本計画は、『豊後高田“昭和の町”』として、地域文化の再生と創造による共感できるまちづくり・賑わいづくりを活性化の基本方針とし、以下の具体的目標を掲げている。

### ① 豊後高田“昭和の町”

「昭和の町」の取組みに学び、引き続き中心市街地を拠点に地域全体の活性化を目指す。

### ② 地域文化の再生

地域が培ってきた伝統や生活環境等の魅力の発掘と活用を図る。

### ③ 地域文化の創造

次世代に受け継がれる地域の良いところを追及する。

### ④ 共感できるまちづくり

市民、来街者、商業者、商工会議所、行政などの中心市街地関係者間での相互に理解・体験し合えるまちづくりを推進する。

また、「昭和の町」づくりでは、以下の4つのキーワードに基づいてハード、ソフト面両面の取組みが行われている。

- |                  |                        |
|------------------|------------------------|
| ① 昭和の「建築再生」      | 修景事業により店舗が建築された当時の趣を再現 |
| ② 昭和の「歴史再生 一店一宝」 | 商店に残る歴史物を一店一宝として展示     |
| ③ 昭和の「商品再生 一店一品」 | 商店自慢の昭和の商品を一店一品として販売   |
| ④ 昭和の「商人再生」      | 商人による昭和30年代と変わらないもてなし  |



昭和の町マップ（資料；豊後高田市）

### 3. 取り組みの体制

商店街の商業者、市、商工会議所等の関係者が共通して強い危機感と活性化への意欲を抱き、相互に連携しながら地域自らの力で活性化に取り組んでいる。ノウハウや資源として不足する部分については、地域外から「駄菓子屋の夢博物館」の館長(小宮裕宣氏)を招いたり、誘致戦略で外部の専門家の協力を仰いだりして外部との人的ネットワークを構築している。

「昭和のまち」の立ち上げ期には商工会議所の職員が中心メンバーとなって「既存商店街再生研究会議」を設けて有効な活動を展開したが、現在は組織はあるが従来のような活動はしていない。2005(平成17)年11月に市職員を中心に「豊後高田市観光まちづくり株式会社」が3セクとして設立された。今後は同社が会社の利益をプールしてまちのマネジメントに当てていきたいとしている。

### 4. 具体策

豊後高田市の中心商店街の再生を目指して、昭和30年代をテーマとする「昭和の町」の取り組みが市商工会議所及び中心商店街の有志等により2001(平成13)年に開始された。「昭和の町」プロジェクトは、昭和30年代の町なみの再生をテーマの中軸に据えた商業と観光の一体的振興策である。観光需要の取り込みと地元需要の掘り起こしの両面を意図して、商工会議所が商業者等とともに事業を推進している。

豊後高田市の中心市街地には、市の中心を流れる桂川を挟んで、西側の高田地区に6商店街、東側の玉津地区に2商店街の計8商店街が存在しているが、「昭和の町」は、このうち主に4つの商店街(中央通り、新町1丁目、新町2丁目、駅通り、総延長約500m、建物約100軒)に属する商店の一部から構成されている。これらの商店街は、廃線となった宇佐参宮鉄道の豊後高田駅前(現在はバスターミナルとして利用)を起点として連続する商店街である。4店舗で取り組み始め、2001年に7店舗(同年内で11店舗)、2003年に27店舗、2006年に38店舗と参加店舗数は漸増してきている。

#### (1) 昭和30年代のテーマ設定

2000(平成12)年度に実施された「商店街まちなみ実態調査」で、商店街のファサードの裏に昭和30年代の建物が多数隠れていることが判明した。そこから、今ある地域資源に目を向けてそれを有効に活用することで中心市街地の活性化を図る方針が打ち出された。昭和30年代当時の面影が残る建物や商品、そして当時のまま商業に従事する地元商業者そのものが中心商店街の個性であり、最も独自性のある地域資源として認識されるに至った。また、昭和30年代は、商店街が最も活気があった時代であったことも、関係者の決断の大きな要因となった。

#### (2) 昭和の「建築再生」

実態調査の結果、店舗のほとんどが昭和30年代以前の建築であることが判明した。そして、これらの建築の表面に取り付けられたアルミサッシ、看板等を撤去して本体を修復することで街なみが再生することが確認された。改修費用は県と市とで3分の2を補助することとした。



(3) 昭和の「歴史再生 一店一宝」、「商品再生 一店一品」

「昭和の町」では、各店の特徴を際立たせるために、それぞれの店伝来の珍しい道具などを「一店一宝」として展示している。また、店自慢の品を「一店一品」として販売している。



中央通商店街



新町1丁目商店街の茶店舗



新町 1 丁目商店街の雑貨店



新しく造られた店舗「出会うの里」



#### (4) ご案内人制度

団体観光客等への対応として、商店街と各商店の歴史などを語って聞かせる「ご案内人」制度を導入しており、大変な人気で予約につながっている。



昭和の町には個性豊かなご案内さんがいます。メンバーはここで暮らす町の人々。昭和の町を知り尽くしたご案内人さんが、土地の言葉で町の隅々まで紹介してくれます。街並みの紹介なのに、何だかそこに暮らす人々の生き生きとした生活まで伝わってくるようです。

ご案内人制度は10日前までにファックスで予約が必要で、ファックス用紙はホームページにてダウンロードが可能。

<http://www2.megax.ne.jp/buntaka/shouwanomachi/shouwanomachi.htm>

ご案内人さんとの出会いも昭和の町の魅力。

ご案内人 (資料:案内パンフレット)

#### (5) 行政による支援

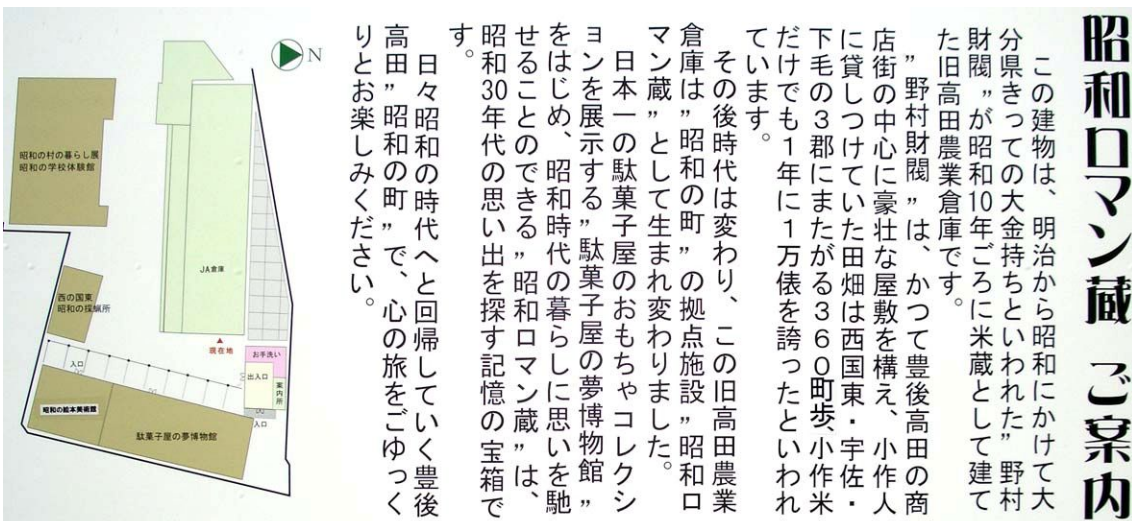
行政による主な支援制度は、以下のとおりである。

- ① 「大分県地域商業魅力アップ総合支援事業」(県 1/3、市 1/3 補助)
- ② 「豊後高田市一店一宝展示施設整備事業」(市独自に制定)
- ③ 「豊後高田市ミニ修景事業」(市独自に制定)

この他、国の補助事業を活用している。

#### (6) 「昭和ロマン蔵」の整備

「昭和の町」の核施設とするために豪商・野村家の元農業倉庫(昭和 10 年頃の建築)を改造し、「昭和ロマン蔵」として 2002(平成 14)年 10 月に開館した。開館後は、まずは市民にこういうものがあるということを認知してもらうために様々なイベントを行った。



昭和ロマン蔵のご案内

この建物は、明治から昭和にかけて大分県きっての大金持ちといわれた「野村財閥」が昭和10年ごろに米蔵として建てた旧高田農業倉庫です。

「野村財閥」は、かつて豊後高田の商店街の中心に豪壮な屋敷を構え、小作人に貸しつけていた田畑は西国東・宇佐・下毛の3郡にまたがる360町歩小作米だけでも1年に1万俵を誇ったといわれています。

その後時代は変わり、この旧高田農業倉庫は「昭和の町」の拠点施設「昭和ロマン蔵」として生まれ変わりました。

日本一の駄菓子屋のおもちゃコレクションを展示する「駄菓子屋の夢博物館」をはじめ、昭和時代の暮らしに思いを馳せることのできる「昭和ロマン蔵」は、昭和30年代の思い出を探る記憶の宝箱です。

日々昭和の時代へと回帰していく豊後高田「昭和の町」で、心の旅をごゆっくりとお楽しみください。

「昭和ロマン蔵」入口にある案内板

「昭和ロマン蔵」には、オート三輪車、紙芝居、木製机のある教室等が展示されている。2002(平成14)年10月には「昭和ロマン蔵」内に「駄菓子屋の夢博物館」が開館した。博物館内には「昭和のまちなみ」「女の子のおもちゃ」「男の子のおもちゃ」「昭和の子ども部屋」「昭和の茶の間」「懐かし屋」の各コーナーがあり、当時のものを豊富に展示している。2005(平成17)年2月にはやはり「昭和ロマン蔵」内に「昭和の絵本美術館」が開館した。観光客は年間20万人を超えるようになった。現在も全国の観光客で賑わっており、まち再生の成功事例となっている。



「昭和ロマン蔵」入口



「駄菓子屋の夢博物館」





「懐かし屋」



「昭和のまちなみ」の店





懐かしい自動車



懐かしいラヂオなど



「昭和の絵本美術館」



## 5. 特徴的手法

「昭和のまち」の取り組みの特徴としては以下が挙げられる。

### ① 商業と観光との一体的な振興

「昭和の町」をテーマにしてハード・ソフトを整備し、多くの団体、個人、グループの観光客を誘客している。こうした域外の来訪者により元気になった商店街は、地元住民に対しても本来の商店街として地域貢献を果たしている。

### ② 隠れた地域資源の発掘

中心商店街に残っていた「昭和」という隠れた地域資源の価値を再評価し、「4 つの再生」をキーワードにして建物の外観の修景事業や個店のストーリー等を再構築した。レトロの町として魅力を引き出して多くの観光客を集めている。

### ③ 公的機関の支援体制の確立

商工会議所、商店街、市がそれぞれの役割を明確化し、お互いに協働しながら推進してきている。市、商工会議所などの公的機関が、個店の修景事業等に対して補助金等により支援するとともに、未利用の農業倉庫を「昭和ロマン蔵」として整備して拠点施設を設けている。2006(平成 18)年 4 月には飲食施設「南蔵」オープンする予定であり、さらに市は大分銀行の跡地を買い取って整備する方針である。

### ④ 昭和 30 年代という求心力のあるテーマの発掘

古き良き時代「昭和 30 年代」を懐古する人々のニーズを徹底したマーケティングにより発掘し、本物志向の「昭和の町」を再生している。発掘にあたっては、70 数店舗を CG で修復してみるなどの工夫を行っている。また、開設にあたっては全国への視察が行われ、特に建築については新横浜ラーメン博物館が参考にされたとのことである。同じコンセプトで青梅市も参考にされ、一店一宝に関しては山形県高島町が参考にされた。ハード整備ではなく何を売り物にするかということに主眼を置いて取り組みが展開されてきた。これらの取り組みは各方面から高く評価され、これまで以下のような様々な賞を受けてきている。

[受賞例]

- ① 2003(平成 15)年度半島地域活性化優良事例表彰(国土交通大臣賞)
- ② 社団法人日本観光協会主催第 11 回優秀観光地づくり賞テーマ賞(商店街再生)
- ③ 毎日新聞社 2003(平成 15)年度地方自治体賞 優秀賞
- ④ 2004(平成 16)年度手づくり郷土(ふるさと)賞(地域整備部門)国土交通大臣賞
- ⑤ 地域再生・地域自慢大会最優秀賞
- ⑥ ふるさとづくり 2005 ふるさとづくり賞内閣官房長官賞「市町村の部」
- ⑦ がんばる商店街 77 選(経済産業省)

## 6. 課題

地元の事業者の意見であくまでも中心市街地での活性化にこだわって事業が展開されてきたが、昭和ロマン蔵の開館後はマスコミでも取り上げられるようになって訪問者が増え、今では年間 20 万人が来訪するようになっている。この数字はロマン蔵の入り口で手でカウンターを使っただけの数字であるため、商店街だけを訪れる人も含めればさらに大きな効果があるものと考えられる。しかしなが

ら、8 つあるうちの川向こうの商店街はこの恩恵を受けていない。また、宮町商店街では夜の飲食店が多いため活性化にはつながっていない。効果がまち全体に及ぶという状況にはなっていない。

マスコミの露出が減ると観光客も減るという不安定さもある。大宰府国立博物館のオープン等、九州内でイベントがあると観光客がそちらに流れる傾向が見られる。最近では個人の訪問者が暫減傾向で、団体は横ばい傾向である。両者の比率は当初は 6:4 であったが今は 5:5 くらいになっている。団体は、別府温泉や湯布院への行き帰りに立ち寄りケースが多い(旅行代理店にコースに入れてもらっている)。ピーク時にはバスが 40 数台来たこともあり、客層は県内、北九州市、福岡市の順に多い。年齢別・性別では 50~60 代の女性が多い。観光バスの平均滞在時間は 1 時間 10 分である。団体客を受け入れられる飲食施設がないため、昼食の前後に来訪されることが多い。昼食は宇佐神宮でとるコースがあり、宇佐神宮からは客数が増えたと感謝されているそうである。

市町村合併で海という観光資源が増えたので、市では「昭和の町」とつなげる方法を考えたいとしている。市内には 6 つの温泉があるが PR しきれていないので、それらとの連携も課題となっている。しかし、宿泊施設がないという問題もある。

その他、以下のような課題が考えられる。

① 「昭和の町」ブランドの維持と商店街、個店の質の維持・向上

全国的に話題を呼んでいる「昭和の町」のブランドを一過性のブームに終わらせることなく維持発展させるためには、商店街、個店のたゆまぬ努力が必要であり、商店街全体としての、また、個店としての質の向上が求められている。まちづくりに賛同して協力する商店を増やし、現在のスポット的な「昭和の町」の商店を点から線、線から面に拡大していくことが重要である。

② 地域経営(エリアマネジメント)

商店街全体(エリア)をマネジメントする機関「豊後高田市観光まちづくり株式会社」の活動により、成果を地域全体に還元する仕組みが求められている。

③ 観光客向け店舗と定住消費者向け店舗とのギャップの解消

④ 拠点施設の整備

来街者により長く滞在してもらえよう、集客、交流、宿泊等の施設整備が求められる。

(参考・引用文献)

国土交通省総合政策局事業総括調整官室監修『自立型地域コミュニティへの道』ぎょうせい、2004 年

日本政策投資銀行、財団法人日本経済研究所『おまち再生計画～豊後高田“昭和の町”ステップアップのために～』2004 年